

ラッセル『私の哲学』第4章「観念論への脇道」レジメ

「ケンブリッジ大学に（1890年10月に）入学する以前、J. S. Mill 以外、哲学者の本は余り読んでいなかった。」



「（入学後の）最初の3年間は自分の時間の大部分を数学にあてなければならなかったけれども、かなりの量の哲学書の読書と大量の哲学上の議論をなんとかやり抜くことができた。」（左写真：1891年、口髭なし）

注：イギリスの大学（学部）は3年制。留学生は1年間のファウンデーションコースがつくので、合計4年ぶんの学費を支払うことになるとのこと。

- ・「学部生であった時、ケンブリッジにおける数学教育はく悪いものであった。その劣悪さは、一部は優等生試験（Tripos）における成績順位制（order of merit 優劣の順位）のせいであったが、その後しばらくして廃止された。多種多様の受験生の能力の間に精密に区別をつける必要性が「書物による研究（学習）」よりも「問題を解くこと」の強調へと導いた。」
- ・「問題を解くことが中心のケンブリッジの数学教育のあり方に疑問をもち、しだいに数学の勉強の手を抜くようになったが、それでも、1893年6月の数学優等試験で7番目の一級合格者となった。」

■ 4年次（1893年10月～1894年6月？）, E. McTaggart 教授の影響でヘーゲリアンとなる。（写真は1893年、口髭あり）

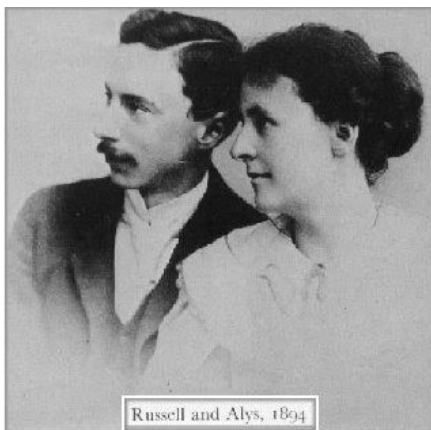


- ・ラッセルが口髭を生やすようになったのは、1893年5月18日に成人（21歳）になった時か？
- ・オットリン・モレル夫人の勧めで、1912年始め？に口髭をそる。

（出典：『オットリン・モレルー破天荒な生涯』（彩流社、2012年7月刊 734+39pp）p.646の注：「オットリンはパーティの最後の髭を見ていない。永遠の見納めは1911年12月だった。」

- ・当時のケンブリッジ大学はカントやヘーゲルのドイツ観念論哲学の影響下にあった。
- ・ラッセルはマクタガート(John M. E. McTaggart, 1866-1925)の大きな影響を受け、1894年(ラッセル22歳)の**人文学優等生試験**の直前には、半ばカント的、半ばヘーゲル的な形而上学の立場に完全に移っていた。

「**優等生試験の後、大学での次の学究上のステップは、給費研究員資格請求学位論文 (a Fellowship dissertation) を執筆することだった。**」



- ・「私は学位論文の主題として「幾何学の基礎」を選び、非ユークリッド幾何学がカントの超越論的芸術哲学 (transcendental aesthetic 超越論的美学) に及ぼす影響について特に注意を払った。」
(ラッセルは1894年12月13日、22歳の時に結婚／写真は1894年)

「この学位論文の執筆作業は、経済学及びドイツ社会主義に関する研究及び執筆作業の間に点在させられており (散りばめられており)、それは二冬 (ふたふゆ) をベルリンに本拠地を置き、私の最初の著作 (German Social Democracy, 1896) の主題となった。」

- ・1895年1月～3月、ベルリン大学で経済学を学ぶために、妻アリスとともに訪独(注：ラッセルは祖母の教育方針のおかげでドイツ語ができた。)
- ・1896年2～3月、London School of Economics (ロンドン大学の前身) で**ドイツ社会民主主義に関する一連の講義** (全6回)

「**1896年秋、妻と一緒にアメリカへ旅行 (約3ヶ月間) は、ケンブリッジ (大学) の偏狭さ (地方根性) を治すのに大いに役立ち、また、私がそれ以前に聞いたことのなかったドイツ人の純粹数学に関する著作 (及び研究) に気づかせた。」**

- ・「私はまた、自分の目的により関連することが (後で) わかった著作、たとえば、デデキントやカントールやフレーゲの著作を――

(学位論文執筆において)私のより助けになった可能性があったが
―― 後になって(学位論文執筆後に)知った。」

「当時の私はひとかどのヘーゲル主義者であり、科学の弁証法の完全な体系を構築しようとしており、その体系は「あらゆる実在は精神的なもの(心的なもの)である」という証明によって完結すべきものであった。」

- ・ 「私は(当時)全ての科学は何らかの抽象化に依存しており、抽象化(抽象的なもの)は遅かれ早かれ(早晚)矛盾に導くものであるの
で、いかなる科学も完全な意味では真ではない、というヘーゲルの
見解を受け入れていた。カントとヘーゲルとが対立する場合には、
私はいつもヘーゲルに味方した。
- ・ **G. E. ムーアと私がカント及びヘーゲルに反抗したのは(反対するよう
になったのは),1898年の終り頃(注:ラッセル26歳の時)であった。」**
(つまりヘーゲリアンの期間は1894年5月頃~1898年末までの約4年半)

「学位論文の後に書いたものはもっとひどいものであった。」

たとえば、「**数と量との関係について**」(訳書pp.46-48)

<これは省略します。>

- ・ **幾何学に関する問題の次に物理学の基礎の研究に2年間を費やした。**

「物理学の哲学において二つの問題が特に私の興味をひいた。」

- (1)**第一は絶対運動かあるいは相対運動かの問題(問い)であった。**

ニュートンは(天体の)回転は当然絶対的なものであって相対的なものではない、ということを示す論証をしていた。この論証は人々を当惑させたが、人々はそれに十分に答える回答を見出しえなかったけれども、その反対の論証、即ちあらゆる運動は相対的であるという論証(議論)も、少なくともニュートンの論証(議論)と同程度に説得力があると思われた。

→ **そしてこの難問(puzzle 謎, 頭を悩ませる問い)はアインシュタインが彼の相対性理論を生み出すまで未解決のままであった。**

「しかしヘーゲル弁証法の見地からは、それは二律背反(アンティノミー)の源泉(起源となるもの)として都合のよいものであった。物理学の中で解決を見出す必要はなく、ただ、物質が非実在的な抽象であり、物質に関するいかなる科学も論理的には満足すべきもの

ではないということ認めれば足りる、と私はそのように（当時）考えていた。」

(2)私に関心をもったもう一つの問題は、物質が空虚な空間によって切り離されている諸原子から成っているのか、それとも全空間（全宇宙）に広がるプレナム（注：“plenum”：物質が充満した空間）から成っているのか、という問題であった。当初、私は前者の見方に傾いていた。

（注：現代物理学・宇宙論に おいても、宇宙において物質が占める割合はごくわずかであり、大部分はダーク・マターやダーク・エネルギーで占められているとされている。）

「1896年（注：ラッセル24歳）から1898年にわたって物理学の哲学について私が書いたものを今読みかえしてみると、（これらの論文は）全く無意味なものであると私には思われる。また、どうしてこれらの論文が無意味でない（当時の）自分が考えることができたのか、想像することが困難であると思う。

（しかし）幸いなことに、この研究（著作）のどれかがもう発表(公表)してもよいと思う段階に達しないうちに、私は自分の哲学全体を変え、この2年間にやった全てのことを忘れ始めていた。」

（A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz, 1900. 以前に発表した自分の哲学関係の論文はガラクタであり間違いを多く含んでいると明言）

「そうではあるが、私が当時書きつけたノート（覚書）には歴史的興味があるかも知れず、また、それらは（現在の）私には見当違いのものであると思われるけれども、ヘーゲルの著作以上に見当違いのものだとは私は考えない。」

=====

（1896年から1898年にわたって物理学の哲学についてラッセルが書いた覚書）

これらの覚書に共通すると思われる思考様式

弁証法（的）論理学 (Wikipediaから)

ヘーゲルの弁証法を構成するものは、ある**命題**（テーゼ＝正）と、それと矛盾する、もしくはそれを否定する**反対の命題**（アンチテーゼ＝反対命題）、そして、それらを本質的に統合した**命題**（ジンテーゼ＝合）の3つである。全てのものは己のうちに矛盾を含んでおり、それによって必然的に己と対立するものを生み出す。生み出したものと生み出されたものは互いに対立しあうが（ここに優劣関係はない）、同時にまさにその対立によって互いに結びついている（相互媒介）。最後には二つが**アウフヘーベン**（aufheben, 止揚, 揚棄）される。

数学や自然科学の方法論として弁証法を適用することの強引さ？

「科学の弁証法の構想（1898年1月1日 ラッセル25歳）」

A. 純粹論理の弁証法 と B. 科学の弁証法

「科学（自然科学）の弁証法」

- ・ 空間と時間を最初からとりいれている弁証法（純粹論理の弁証法よりも、**現象に対して、もっと密接な関係を持つ弁証法**）、即ち「**科学の弁証法**」を構想
- ・ **範疇（カテゴリー）と感覚とが化学的に結合された論理学**
- ・ 科学の弁証法においては、最後の段階以外の全ての段階において、**無矛盾性を余り厳しく要求してはならない**。（通常は、論理学で論理的矛盾を認めたら、何度も「証明」できてしまう。）
- ・ 避けうる矛盾と不可避的な矛盾とを区別をするための原理を見出さなければならない。
- ・ **唯一の不可避的な矛盾は量に関する矛盾であり、「二つのものは概念的にはあらゆる点において同一でありながら、異なったものでありうる」ということと、それにもかかわらず、「そういう相違はやはりひとつの概念でありうる」ということとの間の矛盾である**。

「幾何学から力学への移行についての覚書」

- ・ **物質は、通常、二つの特性、即ち、延長と力の、いずれかによって定義されるものと考えられている**。
- ・ **しかし、空間が純粹に相対的なものであるならば、延長は物質の本質的徴表ではありえない**。なぜなら、**物質は実体としての役割を果たさなければならないからである**。
- ・ 従って残るのは**力のみとなる**。
- ・ **幾何学は空間の異なる諸部分または諸図形の対立を前提とすること、この対立は運動を前提とすること、運動は単なる空間以上のものである物質を前提とす**

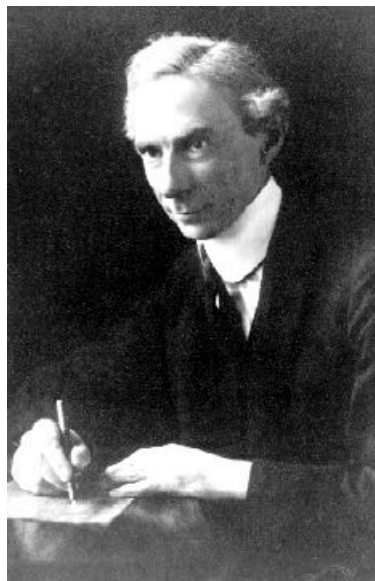
ること（なぜなら、空間におけるひとつの位置は、ただ位置によってのみ定義されるものである限り、運動することはできないからである。）

- ・従って、幾何学は運動する物質なしには不可能なのである。
- ・さらに、運動は原因を持たなければならない、かつ、運動は物質の諸部分の間の相互的關係であるから、これらの諸部分の相互作用こそ運動の原因でなければならないことになる（こうして力学は成立する）。

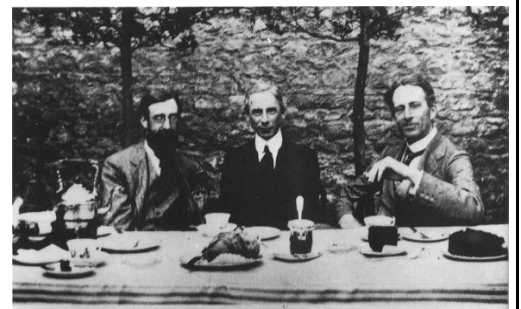


Bertrand Russell. Campaign photograph for the Wimbledon By-Election, 1907.

1907年（35歳）



1916年(44歳)
口髭なし



1917年（45歳）
口髭なし



Russell and Dora with their two children, John and Kate, taken in 1927, probably on the beach near Carn Voel.

1927年（45歳）
口髭なし